

ゴットフリート・アウグスト・ビュルガーの 初期詩篇における「ミンネ」について

糟谷 恵次

G. A. Bürger und die <Minne>

Keiji KASUYA

はじめに

1825年5月のある日、詩人ゴットフリート・アウグスト・ビュルガー(Gottfried August Bürger, 1747-1794)について、老ゲーテはエッカーマンに向かって次のように語った。

ビュルガーは、才能からいうと、私に似通ったところがあった。しかし彼の道徳的な教養の木は、全然ちがった大地に根をおろして、まったく別な方向へ伸びていった。・・・それに彼は、立派な才能の力で、読者を獲得し、彼らを十分堪能させたのだから、別段自分とは縁もゆかりもない同業者の特性を努力して身につけようとするいわれなど、さらさらなかったのだ¹。

これは、純粋な自然的才能を有していながら、それがゲーテから受けた才能となると、その痕跡すらまったく認められない、とビュルガーを評したエッカーマンに対するゲーテの返答である。ちなみに、この対話の30余年前すでに当のビュルガーは没している。

ひとくちにゲーテ時代と言われるが、それはまさにビュルガーの時代でもあった。ほぼ同年齢のこの二人はまさしく同時代人として同じ時代を生きたのであった。しかしながら、並はずれた才能と幸運に恵まれたゲーテに比較し、他方ビュルガーは、この大詩人と肩を並べるほどの豊かな詩的才能を持ちながら、その才能を十二分に生かしきれなかった不遇の詩人であり、またそのすぐれた創造性をを必ずしも正当には評価されるにいたらなかった不運の詩人に他ならない。

本稿は、そうしたビュルガーの正確な理解と正当な評価を探るささやかな試みのひとつである。これまでに彼の民衆詩における問題性や『レノーレ』*Lenore*をめぐる諸問題などを論じてきたが、ここでは、ビュルガーの初期作品を考察の中心に据え、詩人の後期作品における固有な詩的世界を探る一助としたい。

1 ビュルガーの初期詩篇

ビュルガーの詩としてわれわれの手元に遺されているのは、詩人の自選『詩集』*Gedichte* (1789) に収められた142篇、また各種の文芸年鑑に生前に発表されたおよそ80篇、加えて死後徐々に公けにされた90篇近い詩篇がそのすべてである。ハンザー版全集の編者G・ヘンチェルは、ビュルガーのこれらの詩の全体を、その制作時期、スタイル、テーマに基づいて、四つのグループに大別、概説している²。対象となる初期詩篇の考察にはいる前に、まずはその類別に従ってビュルガーの詩作品の全容を概観しておくことにしたい。

その第1グループは、1770年代初頭の、時代の慣習的形式とトポスとで書かれた初期のアナクレオン風作品群で、若きビュルガーの詩的天分によって受容、模倣されて生まれ出た習作といえる。<*Die Nachtfeier der*

Venus〉、〈An ein Maienlütchen〉、〈Stutzerballade〉、〈Das harte Mädchen〉、〈An den Traumgott〉、〈Prinzessin Europa〉、〈Lust am Liebchen〉、〈Amors Pfeil〉などがその代表作である。本稿で主として論じられるいくつかの「ミンネの歌」 *Minnelieder* もこの一群に属す。

2 番目のグループは、一連の「ロマンツェ」ないし「バラード」形式の詩群によって形成される。ビュルガーの詩的名声を揺るぎないものとした〈Lenore〉をはじめとして、このジャンルの作品は数多く執筆され、制作年代順にそのうちの幾篇かを並べてみただけでも、〈Des armen Suschens Traum〉、〈Der Raubgraf〉、〈Lenardo und Blandine〉、〈Das Lied vom braven Manne〉、〈Sankt Stephan〉、〈Frau Schnips〉、〈Der wilde Jäger〉、〈Des Pfarrers Tochter von Taubenhain〉、〈Der Kaiser und der Abt〉、〈Die Kuh〉など、枚挙のいとまがない。

第3の詩群は、詩人の生との深い関わりを示す個人的体験の色彩の強い告白調の「愛の抒情詩」である（〈Mollys Wert〉、〈An die Menschengesichter〉、〈Elegie. Als Molly sich losreißen wollte〉、〈Die Eine〉、〈Überall Molly und Liebe〉、〈Für sie mein Eins und Alles〉、〈An Adoniden〉、〈Die Unvergleichliche〉、〈Der versetzte Himmel〉、〈Naturrecht〉、〈Mollys Abschied〉、〈Das hohe Lied von der Einzigen〉、〈Verlust〉、〈Trauerstille〉、〈Auf die Morgenröte〉、〈Liebe ohne Heimat〉など）。中でも、妻の妹モリーに寄せる愛の歓びと苦悩を唱った一連のソネットは、シラーの容赦ない厳しい批評の標的となり³、一時は詩人ビュルガーを文学史的評価の陰に追いやる一因ともなったが、近年ようやくその再評価の波が押し寄せてきた感がある⁴。

最後に第4のグループとして政治批判的な詩が挙げられる。ハイネをして、「ビュルガーの詩にはわれわれの時代の精神がある⁵」と言わしめた背景には、「民衆詩人」としてのビュルガーが、暗い封建ドイツの圧政の中で、活力ある詩語を通じ民衆の心と精神を勇気をもって唱ったという明白な事実があった。その精神は、〈Der Bauer. An seinen Durchlauchtigen Tyrannen〉、〈Der Edelmann und der Bauer〉、〈Für wen, du gutes deutsches Volk〉、〈Freiheit〉といった、直裁に政治批判を吐露した詩の中にだけでなく、たとえば30年戦争を題材にした〈Lenore〉などの諸作品の中にも連綿と息づいている⁶。

さて、すでに冒頭でも述べたとおり、本稿で考察を加えようとしているのは、第1のグループの詩群、すなわち若きビュルガーの習作期の詩篇である。といっても何年から何年までという詩作時期の明確な線引きが可能でないことは言うまでもない。しかしちなみに、記録として残っている最初期の詩を挙げるなら、それは『ゴットフリート・アウグスト・ビュルガー描くところの、アシャースレーベン、1764年1月4日と4月1日の大火』〈Die Feuersbrünste am 4. Januar und 1. April des 1764. Jahres zu Aschersleben, geschildert von Gottfried August Bürger.〉と題された8詩行17節の断片で、伝記作者アルトホーフによれば、脚韻と長短韻律の正確さに優れ、「宗教的感情に満たされた作品」であったらしい⁷。ハレ大学で神学を学び始めた詩人が、クリスチャン・アードルフ・クロッツ教授を通じて次第に古典文学に目覚め始めていた頃の習作である。だがここで重要なのは、ビュルガーのこの習作時代の時期が特定されることではなく、次の新たな革新的ステップへの移行の様相とその本質が探られることであろう。もし仮にビュルガーの詩のいずれかに詩人独自のトーンと固有な様式が内在しているとすると、まさにその移行の過程に照明をあてることによってその真の姿が浮き彫りにされるに違いない。換言するなら、独自の文学世界の表現とみなされる後期の恋愛詩を正當に評価するためには、その予備段階とも呼ぶべき第1グループの初期詩篇に関する適切な考察が必然的に要求されるのである。

2 ビュルガーとアナクレオン風

ビュルガーの詩が、とりわけ最初期の詩篇において、時代の流行であったアナクレオンの詩風を色濃く残していることに関しては、研究家の間でも異論の余地がない⁸。後年、秀逸なバラードを数多く創作し、迫真の告白調の恋愛詩を生み出した詩人の姿はまだここには認められない。1769年8月の制作日付をもつ次の詩

は、まさにそうした初期詩篇の特徴を如実に示す一例である。

Stutzerballade

[1] Freund Amor, kannst du machen
Für einen hübschen Kuß,
Daß mir Agneschen lachen
Aus frommen Augen muß ?

[2] O allerliebste Sachen,
Die kaum ich nennen kann,
Schenkt' ich für dieses Lachen
Dir, lieber kleiner Mann !

[3] In manchem Spiel um Pfänder
Hab' ich erobert mir
Viel schöne bunte Bänder,
Die alle gäb' ich dir.

[4] Ja dies geraubte Müsschen
Empfingest du sogar ;
Und dieses Federbüschchen,
Aus Minnas blondem Haar.

[5] Und deinen Köcher schmückte
Von golddurchwirktem Band
Ein Röschen, welches stickte
Des schönsten Mädchens Hand.

[6] Weckst du ihr süßes Lachen,
Sieh, so verdienst du dir,
Die Nymphen naß zu machen,
Die kleine Sprütze hier.

[7] Auch sollen dich belohnen
Bonbon und Marzipan,
Vortreffliche Makronen,
Und was dir lüsten kann.

[8] Und siehst du dieses Gläschen
Voll Syrakuserwein ?
Erdenke mir ein Späßchen !
Du bist ja sonst so fein.

[9] Ha ! Kleiner, ich erfinde
Viel eher einen Plan !
Den höre mir geschwinde
Mit beiden Ohren an !

[10] In eine kleine Fliege -
Siehst du, was ich erfand ! -
Verwandle dich und fliege
Auf ihrer Schnürbrust Rand.

[11] Dort gleite durch die Falte
Im zarten Musselin
Bis zu dem tiefen Spalte
Des warmen Busens hin.

[12] Dort wage mir hernieder,
Geschickt nach Bergmannsart
Anschließend dein Gefieder,
Die wollustvolle Fahrt.

[13] Dann muß es dir gelingen,
Ihr, neidenswerte Müh' !
Ein Lächeln abzuzwingen ;
Da kitzle, kitzle sie !⁹

この詩の背景に、詩人の現実の愛の体験を問うことは馬鹿げている。

ここで作者は、主観的・個人的に心情を吐露することなく、「伊達男」(Stutzer)の仮面の陰に終始身を潜める。詩中の主人公「わたし」は、真剣さの微塵もない、からかいまじりの洒落男の仮面を被って、ローマ神話の愛の形姿「アーモル」(Amor)に対し、愛する少女「アグネス」の微笑を獲得する手助けを乞い、最

後には陽気な洒落に落ちをつけて好色に戯れるのである。明らかにビュルガーはここで、手本となる型どおりの愛のモデルに追従している。ビュルガーは後に1778年版の『詩集』においてこの詩の表題を〈*Stutzerdelei*〉と変更したが、「遊戯、ふざけ、いちゃつき」を意味する“*Tändelei*”というその語からも、この詩の内容と様式が本質的にドイツ・アナクレオン風モードのただ中にあることを端的に窺い知ることができる。こうしたテーマおよびスタイルの選択、愛の見方は、グライムを中心とするハルバーシュタットのアナクレオン詩派に共通の事項であった。ちなみにこの一派に属していたのは、ゲオルク・ヤコービ、エーバーハルト・カール・クラマー・シュミットらであり、またこの一派に近かった詩人としてヨーハン・ベンヤミン・ミヒャエリスや若きヴィルヘルム・ハインゼ、またビュルガーの往年の友ゲッキングらの名を挙げることができる。

ここで話題になっているドイツ・アナクレオン派とは、1740年頃から1760年ないし70年頃に至る時期に隆盛をきわめたロココ文学の一形態である。周知のとおりロココ文学は、18世紀啓蒙思潮の合理主義的オプティミズムを基盤として展開された、軽快優美かつ繊細優雅な様式特性をめざす社交文学であり、アナクレオン派の抒情詩もヴィーラントの韻文物語や牧歌とならんでその主流のひとつであった。アナクレオン派の創始者は、この派の規範となったギリシャ詩集『アナクレオンテア』*Anakreon-tea*を1746年に『アナクレオン頌歌』*Die Oden Anakreons*と題して訳出したグライム(Johann Wilhelm Ludwig Gleim, 1719-1802)とウーツ(Johann Peter Uz, 1720-1796)の両詩人たちであった。中でもグライムはビュルガーにとって、〈*Stutzerballade*〉を携えたボーエが友人ビュルガーをこの先輩詩人に売り込んで以来、兩人の間に親交が深まったという経緯もあり、ビュルガーの初期詩篇を考察する上で欠くことのできない詩人のひとりでもある。

このグライムが自著の『諧謔詩の試み』*Versuch in scherzhaften Liedern* (1744-45)の序文の中で述べた次の言葉は、アナクレオンの詩歌の本質を的確に規定すると同時に、ビュルガーの初期詩篇の特質をも正確に表現していて重要である。「詩人の作品から彼の道徳を推論してはなりません。……というのも詩人は、たとえ自分の徳性が疑われるようなことがあっても、自らの機知を示すためにだけ書くのですから。詩人は、あるがままに自分の特質を示すのではなく、その詩の要求のままに自分の特質を示すものなのです。」

アナクレオン派の詩人たちはかかる姿勢で、この世の遊び、生の喜びを、ある時は時代の楽観主義的傾向に依拠しつつ、またある時は悲歌的・感傷的な基調に支えられながら、軽快優雅に唱和した。その際、そこで扱われた種々のテーマがその本質に迫る真剣さで唱えられることは希であった。すなわち、高尚な人生問題や高邁な思想がその主題に選ばれることはほとんどなく、酒と恋とバラが、技巧と風刺と機知をこらした軽妙な調べに合わせて奏でられた。そのような詩作は、まだ依然として、伝統的・因習的なモチーフを巧みに形式化するという職人的詩作行為の域を越え出るものではなかった。1740年以降に活躍した重要な作家たちのほとんどすべてが、かれらの文学活動の出発点において、時代のこうした遊戯的・作為的文学傾向の洗礼に等しくあずからずにいなかったことはきわめて興味深い事実である。すなわち、愛と友情と社交と酒と詩という同一のテーマを、若きクロプシュトック、レッシングのみならず、ライブツィヒ時代のゲーテ、またクラウディウス、加えてゲッティンガー・ハインの詩人たちが、口をそろえてステレオタイプに、アナクレオン風の流儀で唱ったのであった。ここに引用した〈*Stutzerballade*〉の作者ビュルガーもちろんその例外ではなかった。

ところで、ビュルガーの詩においてアナクレオンの詩風を示す作品は、とりわけ1773年(ビュルガー25歳)までの時期に頻出する。実例をもって示すと、〈*Die Nachtfeier der Venus*〉、〈*An ein Maienlütchen*〉、〈*An den Traumgott*〉、〈*Amors Pfeil*〉、〈*Das Lob des Helenens*〉、〈*Collin und Juliette*〉、〈*Das Hummellied*〉などがそれに該当する。これらの作品は、牧歌・田園詩のモチーフと密接に結びついたアナクレオンの諸要素を随所に含みもち、当代のロココ的社会状況に迎合する機知と戯れの文芸と言えよう。しかしながらこの習作時期に同時に、ビュルガーの創作態度におけるある種の変化の兆しを示す詩がいくつか散在する。それらはたしかに、すでに述べてきた時代の文学的傾向から完全に抜け出た独自固有の世界を提示するにはいまだ至ってはいないが、そこには明らかに、作者の文学行為におけるある種の質的な飛躍ないしその可能性

が著しく認められるように思われるのである。それはビュルガーにおいて、ドイツ中世の詩歌ミンネザングへの際立った関心を通して始まった。

3 ビュルガーと「ミンネ」

「ミンネザング」(Minnesang) がビュルガーに深い関心を惹き起こさせるきっかけを与えたのは、スイス人ボードマー (Johann Jakob Bodmer, 1698-1783) による「大ハイデルベルク歌謡写本」*Die große Heidelberger Liederschrift*、別名「マネッセ写本」*Die Manessische Liederschrift* からの抜粋の刊行であった。ゲッティンゲン・サークルのミラーおよびヘルティールとならんで、ビュルガーも、過去から掘り起こされたこの文学的遺産に大なる刺激を受け、新しい「ミンネゼンガー」(Minnesänger) をめざした若者たちのひとりであった。

ビュルガーの初期詩篇には、かかる影響下で生まれた、「ミンネ」(Minne) の語を表題にもつ詩が、五篇存在する。執筆年代順にそれらを列挙してみると以下の通りである。

- (1) <Die Minne> : „Ich will das Herz mein lebelang ...¹⁰“ (1772)
- (2) <Minnelied> : „O wie schön ist, die ich minne ...¹¹“ (1772)
- (3) <Minnelied> : „Der Winter hat mit kalter Hand ...¹²“ (1773)
- (4) <Minnesold> : „Wem der Minnedienst gelinget ...¹³“ (1773)
- (5) <Minnelied> : „Hört von meiner Minniglichen ...¹⁴“ (1774)

これらの詩篇におけるミンネザングの直接的影響とおぼしきものを簡単に記してみよう。まず最初にその例証として、(2)、(3)、(4)の3篇が挙げられる。これらの詩には、ビュルガーの創意とは言えない中世的モチーフの借用がいくつか確認される。例えば、(2)の「ああ 何と美しいことかわたしが愛するそのひとは…」の中心に据えられているのは、マリア崇拝が深く浸透していたカトリック中世の抒情詩においてごく一般的に用いられた、恋人と聖母マリアとの比較の手法に他ならない。次に(3)の「冬は冷たい手で…」では、まず最初に冬の描写が行われ、その冬の像が後半部で恋人の対照像として機能するのだが、詩の冒頭において自然を歌うこのいわゆる「自然序詞」(Natureingang) も、ミンネザングにおいて特に好まれた技巧のひとつであった。また、ヨーハン・マルティン・ミラーへの献呈の詞をもつ(4)の「ミンネの奉仕に成功せる者…」の冒頭における<Kaiser-Motiv>も、中世の抒情詩に様々な形で知られており、ビュルガーの創意によるものではない。

以上の3篇に比較すると、残りの2篇における影響関係は幾分曖昧である。例えば、中世時代のミンネの歌人に身をおいて歌われた(1)には、中世的な技巧や手法の明確な影響が直接的な形では見当たらないものの、冒頭で「わたしはこの心を生涯かけて、いとしいミンネに捧げる所存…」と歌い出すミンネゼンガーの形姿に、詩人としての自己の姿を重ね合わせようとするビュルガーの詩的使命とその意図が明瞭に窺われるように思われる。また、愛の歓びを主題とする最後の(5)「聴いておくれわたしの愛する女のことを…」という単詩節の詩は、キーワードとして「ミンネ」・「五月」・「愛」の語をもって歌われる。ちなみにその内容とトーンは、中世の詩人ウルリヒ・フォン・リヒテンシュタインの詩を想起させる¹⁵。

このようにビュルガーの詩には、「マネッセ写本」の抜粋からの知識と推測される中高ドイツ語の歌謡の痕跡を確認する事が可能である。しかしビュルガーは、こうしたテキストを単純に模倣し、その手法や技法を借用しただけではなかった。すなわち、アナクレオン流のスタイルで詩作された初期詩篇の中で、ミンネザングと何らかのかかわりを持ったこれらの詩は、他のものと比較すると、いささか趣きの異なった印象を与えるように思われるのである。さてそれでは、そうした印象の相違の要因はいったいどこにあるのか、次の詩を実例として考察してみよう。

O wie schön ist, die ich minne,
 O wie schön an Seel' und Leib!
 Öfters ahndet meinem Sinne,
 Diese sei kein sterblich Weib.
 Schier verklärt, wie Himmelsbräute,
 Ist sie aller Flecken bar.
 Heiliger und schöner war
 Kaum die Hochgebenedeite,
 Die den Heiland uns gebär.¹⁶

ああ何と美しいことか 私が愛するその女^{ひと}は
 ああ何と美しいことか 身も心も！
 一度ならず 私は想い願う
 この女が 死してゆくことなかれと。
 処女マリアのごとく 輝かしく
 この女には しみひとつない。
 これほど聖らかで美しくはなかったのだ
 救い主を生んでくださった
 あの聖母マリアでさえ。

1772年3月に執筆されたこの詩は、(4)の〈Minnesold〉とともに、まず1774年度版の『ゲッティンゲン・ミューズ年鑑』に初めて登場し、その後、『詩集』の初版(1778年)および第二版(1789年)に再録された。ここでは、恋い焦がれる女性が聖母マリアを引き合いに出して賛美される。それは、すでに述べたように、ビュルガーの創意によるものではなく、マリア崇拝が深く浸透していたカトリック中世の抒情詩にごく一般的に用いられたモチーフの借用に他ならなかった。しかしながらこの点が、当時のある読者層に不快の念を抱かせるきっかけを与える結果となった。1774年に刊行された雑誌『ゲッティンゲン学術報知』*Göttingische Anzeigen von gelehrten Sachen*では、ある書評家がビュルガーのこの短詩にふれて、「聖書の中に登場する美しい女性を氏が必要とするなら、旧約聖書の中には似たような美人がたくさんいるのだ。ケレンハプク[ヨブの美しい娘たちの一人]と同じくらい裕福で可愛らしい少女を手に入れば、ビュルガー氏もさぞかし満足できるだろう¹⁷」と揶揄している。しかし、こうした酷評に対するビュルガー自身の次の発言は、この詩の理解にとってばかりでなく、詩に対するビュルガーの姿勢を理解する上できわめて興味深い。『詩集』初版の序文の中でビュルガーは以下のように自己弁護を試みる。

・・・人々が私に語って聞かせてくれたところによると、気鬱で感情的な人々が私の詩のいくつかに不愉快で腹立たしいものを見つけたようだ。私はそのような箇所を、自分の頭と心に照らしてよく吟味した末、そのような不快の念など感じられないと思った。自分の頭は愚かでもなく心も悪くないと思ったので、それらの箇所はそのままにしておいた。この事に関してこれ以上の弁明を記すことは、健全な悟性の持ち主にこそ不快の念をおぼえさせることになるだろう。というのも、ひとりの詩人が、完全な女性の美と徳に関する描かれるべき自己の理想を高揚するため次のように書き置く場合、聖母あるいは救世主の尊厳を損ねていると評することが実に愚かしいことであるのかは、健全な者であればその誰の目にも明らかであるからだ：

Heiliger und schöner war
 Nur die hochgebenedeite,
 Die den Heiland uns gebär.

このひとほど聖らかで美しかったのは
 救い主を生んでくださった
 聖母マリア様ただおひとり。

最初の異文ではなるほど nur の代わりに kaum と書かれていたが、意味と言葉に従えば、それは同じことだ。・・・自分の体験した恋愛事件に純真さがそぐわない愛の歌をうたう詩人はいないだろう。詩人がこの少女を愛し、またあの少女を愛したことを、筆は知っているのだ。今やそれは比較し始める、そしてその時明らかに実際の少女が、想像力(Einbildungskraft)によってうたわれた少女に遠く及ばないことがはっきりとするに違いない。・・・すでに述べた私の歌は、プロヴァンスのミンネの歌の精神でうたわれた、ひとつの想像の産物(Fantasie)に他ならない¹⁸。

ここで言及されている「想像力」や「想像の産物」という語が、ビュルガーのポエトロギーにおけるもっとも重要な概念であることは言うまでもない。それは、『民衆文学についての心情吐露』*Herzensausguß über Volkspoesie* (1776) および『ポエジーの通俗性について』 *Von der Popularität der Poesie* (1777-78) と題された二篇のエッセー、『詩集』に添えられた二篇の序文 (1778; 1789) 、ならびに書簡中に散在する無数の文学的所見において、彼の後の「民衆詩」*Volkspoesie* のイデーを支えることになる中心的概念のひとつである。

ところでここで見逃してはならない重要なことは、そうした概念が「プロヴァンスのミンネの歌の精神」と結びつけて語られている点である。すなわち、ミンネザングという中世の抒情歌謡がこの時期のビュルガーにとってどの程度の深さで民衆文芸として明確に理解されていたかは別問題としても、まさにこうした過去の遺産にふれることが、当時一般的であった神話的な道具立てから自己の愛の抒情詩を解放し、自然なトーンの発見を促し、そして自己の詩的言語を豊かにする手助けとなったと思われるからである。ミンネザングの精神を覚醒し、その精神に即して詩的に自己を形成するというそのような新たな試みがもっとも顕著に表れていると感じられる他の〈*Minnelied*〉を手がかりに、さらにその試みの意図と本質を探ってみることにしよう。

4 「ミンネ」から「リーベ」へ

Minnelied

ミンネの歌

Der Winter hat mit kalter Hand
Die Pappel abgelaubt
Und hat das grüne Maigewand
Der armen Flur geraubt,
Hat Blumen, blau und rot und weiß
Begraben unter Schnee und Eis.

冬は つめたい手で
ポプラの木を裸にし
緑なす五月のよそおいを
哀れにも 野原から奪い去り、
青や赤や白の花たちを
雪と氷の下に埋めた。

Doch, liebe Blumen, hoffet nicht
Von mir ein Sterbelied!
Ich weiß ein minniglich Gesicht,
Worauf ihr alle blüht;
Blau ist des Augensterne Rund,
Die Stirne weiß und rot der Mund.

だが うつくしい花たちよ
ぼくに弔歌など望んではいけない!
ぼくには 恋しいあの娘がいる
おまえたちは あの娘の顔に咲く花
つぶらな瞳は青く
額は白く そして唇は赤く。

Was kümmert mich die Nachtigall
Im aufgeblühten Hain?
Mein Mädchen trillert hundertmal
So süß und silberrein;
Ihr Atem ist, wie Frühlingsluft,
Erfüllt mit Hyazinthenduft.

花さかる森の 小夜啼鳥に
どうして心ひかれよう。
あの娘は 幾度となく繰り返し
銀鈴のように澄んだ甘い声をひびかせてくれる
あの娘の息は ヒヤシンスの
香りに満ちた まるで春風のように。

Wie wenn des Westes linder Hauch
Durch junge Maien weht,
So säuseln ihre Locken auch,

あの娘がそばを通り過ぎると
巻き毛もさらさら 音を立て、
それはまるで おだやかな西風が

Wenn sie vorübergeht.
O Mai, was frag' ich viel nach dir?
Der Frühling lebt und webt in ihr! ¹⁹

さわやかな春の野にそよぐよう。
ああ 五月よ ぼくは何も訊ねはしない
春は あの娘のなかにいきづいているのだから！

ビュルガーはここで、「自然序詞」というミンネザングの模範に依拠しながら、目の前の冬を打ち消す恋人の美と魅力を、四季に拘束されえない永遠の愛の春として歌いあげた。その際、先の〈Stutzerballade〉に見られたような、愛のおもねりもわざとらしい求愛も、伊達男の仮面も神話の道具立ても、ここにはまったく見当たらない。あるのは、自身の体験を直裁に描こうとする作者の意志と、感性のフィルターを通して濾過されたその表現そのものであり、初期詩篇に共通していたアナクレオン風の遊戯性・作為性はほとんど感じられない。

1772年11月2日付ボイエ宛書簡の中でビュルガーは、「自分のこれまでの心地よばかりでいちゃついた詩作法に嫌気がさし始めている²⁰」と告白するに至るが、同年に成立したと自己報告されるこの詩は、それまで手本としてきたアナクレオンの詩作法からの離反と、同時代の支配的文学傾向に対する新たなボエジーの模索を意図した作品として注目に値するのである。

またこの〈Minnelied〉と同様に、後の「モリー・リーダー」(Molly-Lieder)の中核的作品のひとつである〈Das hohe Lied von der Einzigen〉の冒頭に発展してゆく次の詩も、いまだ完成の域に達していないと判断されたためか公表は差し控えられたものの、明らかに上述の新しい詩作法の特質を顕著に示している。

Minnelied

ミンネの歌

Hört von meiner Minniglichen,
Lieben, hört ein neues Lied.
Denn der Winter ist entwichen,
Maienlust, mit Wohlgerüchen,
Maienwonn' ist aufgeblüht.
Lieben, öffnet eure Sinne;
Mai erwacht,
Minne lacht,
Mai hat Minne,
Minne Sang wohl angefacht.²¹

聴いておくれ わたしの愛する女^{ひと}のことを
恋人たちよ 聴いておくれ 新しい歌を。
冬は過ぎ去り
五月の歓びが 芳しい薫りとともに
花ひらいたのだから。
恋人たちよ 五感をひらいておくれ
五月はめざめ
ミンネはわらい
五月はミンネに
ミンネに 歌うたわせたのだもの。

「春の精神にあふれている」とボイエが評したこの詩は、もともとは婚約者ドレッテに寄せて書かれたものであった。「善いところも悪いところもそっくりすべて、あるがままのあの愛らしいひと (die minnigliche) を、この世の何にもましてわたしは心から愛しています。彼女は他の誰でもなく、わたしにとってすべてなのです²²」(1774年3月7日付ボイエ宛書簡)というビュルガーの想いがそのまま詩の形に昇華したのであったろう。詩人の愛の実体験が、生氣ある詩語と律動感ある語り口で巧みに表現されていると言えよう。詩人のこの愛の心情吐露に、「なんと晴れやかな／自然のひかり／日はかがやき／野はわらう・・・」の出だして始まるゲーテのあの有名な抒情詩『五月の歌』*Maifest*²³を想起する者も少なくないだろう。自然と詩人の魂との宇宙的な一体感を感じさせるゲーテの詩ほどの深みに到達してはいないものの、このミンネの歌も、明らかにビュルガーの詩が新たな局面を迎えようとしている事実を歴然と語っている。こうした詩をその基底で動かしている原動力は、もはや技巧や機知といった職人的文芸の特質ではなく、想像力や感性に代表される情動の実体には他ならないのではあるまいか。

ところで、創作態度におけるこのような根本的変質は、これまで述べてきたミンネの歌におけるその後の

改作過程に、なお一層はっきりと読みとることができる。すなわち、上述の五篇の詩のすべてがその後何らかの変更を加えられて読者の前に提示されたのである。ビュルガーによる推敲の詳細をここで論じる余裕はないが、この小論で問題にしてきた“Minne”の語がその後ほとんど姿を消し、“Liebe”に置き換えられる事情についてだけ簡略に触れておこう。

具体例を挙げると、表題に変更を加えられたものが3篇ある。1789年の『詩集』第二版では、(1)の〈Die Minne〉は〈Der Liebesdichter〉に、(2)の〈Minnelied〉は〈Gabriele〉に、(3)の〈Minnelied〉は〈Winterlied〉に変更されている。またその際、これらの詩の中で用いられた動詞“minnen”は悉く“lieben”に置き換えられている。たしかに初めからビュルガーは、“Minne”の語が本来もっていた歴史的実質と文化的背景を厳密に考慮してこの語を用いたわけではなかった。しかしながらこの語は、詩作を開始してまもない時期のビュルガーにとって、その時期の固着した詩作法から自己を解放する有力な一手段であった。それゆえに、ひとつの試みの手段として借用されたこの語が、その内容をのせるさらに相応しい語に転換を余儀なくされたとしてもなんら不思議でないばかりか、その移行は必然的な帰結なのである。

結 語

ビュルガーの抒情的創作の過程で、まず第一に彼の詩作法を内容と形式の両面から規定したのは当時のアナクレオンの詩風であった。しかしそうした習作期にも、後期の作品と密接に関連する数篇の詩が生み出された。現実の感性的体験によって育まれた真の感情の表現が、それらの「ミンネの歌」の中でかすかに息づきはじめていたのであった。中世の古歌謡の精神と結びつくことによってビュルガーは、その古（いにしえ）のトーンを覚醒しつつ詩的自己形成を試みたのである。これらの詩が、後の深遠なビュルガー独自の詩的世界を構築するためには、さらにその後の詩学上の理論的裏打ちと、苦悩にみちた「モリー体験」をまたなければならぬ。

<注>

- 1 エッカーマン『ゲーテとの対話（上）』（山下肇訳）、岩波書店 昭和43年、202ページ。
- 2 Günter Häntzschel: Nachwort zur *Hanser Ausgabe : Gottfried August Bürgers sämtliche Werke*. München Wien 1987, S. 1408 ff.
Vgl. Günter Häntzschel: *Gottfried August Bürger*, München 1988.
- 3 拙稿「G.A.ビュルガーの民衆詩論」（上智大学『ドイツ文学論集』第30号、1993年）146ページ以下を参照。
- 4 Gerhard Kluge: *Gottfried August Bürger. In: Deutsche Dichter des 18. Jahrhunderts. Ihr Leben und Werk*. Hg. von Benno von Wiese. Berlin 1977, S. 549-618.
- 5 ハインリヒ・ハイネ『ドイツ・ロマン派』（山崎章甫訳）、未来社 1985年、88ページ。
- 6 拙稿「ビュルガーの『レノーレ』における詩的影響の諸相」（駒沢女子大学『研究紀要』創刊号、1994年）を参照。
- 7 Ludwig Christoph Althof: *Einige Nachrichten von den vornehmsten Lebensumständen Gottfried August Bürger's*. In: *Gottfried August Bürger's sämtliche Schriften* Bd. 4. Hg. von Karl Reinhard. Göttingen 1802 (Nachdruck 1970), S. 17.
- 8 Vgl. Lore Kaim-Kloock, *Gottfried August Bürger. Zum Problem der Volkstümlichkeit in der Lyrik*. Berlin 1963.
Gerhard Kluge: a. a. O.
Günter Häntzschel: *Gottfried August Bürger*. München 1988.

- 9 *Gottfried August Bürger: Gedichte*. Hg. von Arnold E. Berger, Leipzig Wien 1891, S.17 f. 以下、*Meyer Ausgabe* と記す。
- 10 *Meyer Ausgabe*, S.37f.
- 11 *Meyer Ausgabe*, S.36.
- 12 *Meyer Ausgabe*, S.42f.
- 13 *Meyer Ausgabe*, S.50f.
- 14 *Meyer Ausgabe*, S.74.
- 15 Vgl. Ulrich Müller: "Darf ich noch ein Wörtchen lallen?" : Gottfried August Bürgers Liebeslyrik in der Tradition des europäischen Mittelalters. In : *Gottfried August Bürger (1747-1794), Beiträge der Tagung zu seinem 200. Todestag vom 7. bis 9. Juni 1994 in Bad Segeberg*. Frankfurt am Main 1994, S.86ff.
- 16 *Meyer Ausgabe*, S.36.
- 17 Anmerkung zur *Hanser Ausgabe*, S.1181.
- 18 *Gottfried August Bürger: Sämtliche Werke*, hg. von Günter und Hiltrud Häntzschel. München / Wien 1987, S.718f.
- 19 *Meyer Ausgabe*, S.42 f.
- 20 *Briefe von und an Gottfried August Bürger. Ein Beitrag zur Literaturgeschichte seiner Zeit. Aus dem Nachlasses Bürgers und anderen, meist handschriftlichen Quellen*. Hg. von Adolf Strodtmann. 4 Bde. Berlin 1874. (Nachdruck Bern 1970). Bd.1, S. 75.
- 21 *Meyer Ausgabe*, S.74.
- 22 *Briefe*, S.199.
- 23 *Hanser Goethe-Ausgabe*, S. 30f.